

京都大学

生態学研究センター・ニュース No. 51

京都大学生態学研究センター

Homepage: <http://ecology.kyoto-u.ac.jp>

センター長 和田英太郎

Center for Ecological Research
Kyoto University

目次

- 教官公募のお知らせ
- 京都大学生態学研究センター協議員会（第30回）議事要旨
- 京都大学生態学研究センター運営委員会（第22回）議事要旨
- 京都大学生態学研究センター協議員会（第31回）議事要旨
- 公募実習のお知らせ
- 公開実習のお知らせ
- 調査船利用案内
- 調査船利用規定
- 公募研究会の報告
- テクニカルレポート（琵琶湖定期観測）の発刊のお知らせ
- 協力研究員リスト
- 部門新設
- 編集後記
- 今後のスケジュール

教官公募のお知らせ

当センターでは、下記の要領で生態構造研究部門の教官を募集しています。

- 生態構造研究部門 -

1. 採用人数：助教授 1名
2. 対象分野：生態科学一般
3. 希望する内容：

当センターは、1991年4月に設置された10年時限（2001年3月まで）の全国共同利用施設である。大部門的に運営されているため、特定の部門に厳密に対応するようには考えていない。現在、当センターでは「地球環境攪乱下における生物多様性の保全及び生命情報の維持管理に関する総合的基礎研究」「陸域生態系の地球環境変化に対する応答」「地球環境情報収集の方法の確立」の三プロジェクトを推進している。これらのプロジェクトの推進・運営に積極的にかかわり、時限後の組織構想や新たな国内外共同プロジェクトに協力できる人であれば、

応募者のこれまでの研究分野が生態学である必要はない。年齢の制限も特にない。国籍は問わない。

4. 着任予定：決定後、なるべく早い時期
5. 提出書類：自薦・他薦にかかわらず、以下の書類を提出してください。
 - 履歴書 1 部
 - 研究業績目録 1 部（主要著作 5 編以下に印を付して下さい）
 - 主要著作（上記）の別刷等各 1 部（これらに関する解説、総説等があれば添付すること）
 - これまで行なってきた研究の概要(2000 字程度)
 - センターに来られた場合に応募者が推進したい研究プロジェクトの具体的な構想 (2000 字程度)
 - 研究内容について問い合わせることのできる人物 2 名の氏名と連絡先
6. 公募締切：1998 年 8 月 20 日（木）（消印有効）
7. 書類送付先：〒520-0105 大阪市下阪本 4 - 1 -23
京都大学生態学研究センター長 和田英太郎
封筒の表に「助教授人事応募書類」と朱書き、簡易書留によって郵送のこと。
8. 問い合わせ先：
 - 研究内容等について
生態学研究センター長 和田英太郎
Fax：077-578-1436
e-mail：wadaei@ecology.kyoto-u.ac.jp
ホームページ：アドレス <http://ecology.kyoto-u.ac.jp>
 - 提出書類について
生態学研究センター総務掛
Tel：077-578-0580
Fax：077-579-8457

京都大学生態学研究センター

協議員会(第三十回)議事要旨

日時：1998 年 4 月 20 日（月）13 時 30 分～14 時 30 分

場所：京大会館 217 号室

出席者：協議員 10 名、幹事 1 名

議題：

1. 実験生態研究部門の 2 教授選考
議長が人事選考委員会と運営委員会での審議経過を報告し、川端善一郎教授と清水勇助教授の 2 名の候補者を推薦した。研究業績の紹介後、投票により川端教授と清水助教授の 2 名を実験生態研究部門の教授として選出した。
2. 平成 11 年度概算要求
第 2 研究棟建設などを内容とする要求内容を承認した。
3. 協力研究員
1998～99 年度の協力研究員として 86 名を承認した。

報告事項：

1. 新営「研究棟」の進捗状況
センター大津地区の教官が10月から11月にかけて新研究棟に移転し、12月中頃に落成式等を行う予定。
2. センター改組
平成12年度の概算要求として提出することを目指して準備している。
3. 熱帯生態研究部門教授選考の経過報告
10名の応募者があり、選考委員会において選考中である。

(文責：安部琢哉)

京都大学生態学研究センター

運営委員会(第二十二回)議事要旨

日時：1998年5月29日(金)13時35分～14時55分

場所：京大会館215号室

出席者：運営委員21名、幹事1名

議題：

1. 熱帯生態研究部門教授選考
人事選考委員会の山岸委員長欠席のため、久野委員が代理で応募者10名の中から候補者として2名を推薦し、質疑応答の後、投票による委員の意見分布を得た。
2. 生態構造研究部門の助教授人事
基準委員会から公募文案が出され、内容の一部を修正(委員長一任)することで了承された。

報告事項：

1. 実験生態研究部門教授(2名)
清水勇助教授は6月1日付で昇任予定、川端愛媛大学農学部教授は、7月1日付任用の予定である。
2. 調査船「はす」の竣工披露
長尾新総長の出席を頂き、5月28日に行った。

(文責：安部琢哉)

京都大学生態学研究センター

協議委員会(第三十一回)議事要旨

日時：1998年6月5日（金）13時50分～14時30分

場所：京大会館216号室

出席者：協議員8名、幹事1名

議事に先立ち、清水新委員の紹介が行われた。

議題：

1. 教官人事

- 熱帯生態研究部門教授の選考
議長より、人事選考委員会と5月29日（金）に開催された第22回運営委員会の審議経過が報告され、候補者1名が推薦された。審議の後、投票によって熱帯生態研究部門教授を選出した。
- 生態構造研究部門助教授の公募
議長より「選考基準案」が報告され、承認された。選考委員として、6名が推薦され、承認された。

2. その他

センター所属の協議員が増加したことに伴い、センター外の委員を増やし、センター所属の委員と同数にすることを議長が提案し、承認された。次回協議員会より実施する。

報告事項：

- 実験生態研究部門の教授（2名）
清水勇氏が6月1日付で昇任、川端善一郎愛媛大学農学部教授を7月1日付の任用予定で手続きを行っている。

（文責：安部琢哉）

**京都大学生態学研究センター
1998年度（平成10年度）公募実習募集要項**

1. 実習課題

河川における生物の生息場所利用

2. 実習の目的・実施内容

河川と水辺における生物群集の調査法と環境測定法の基礎を習得するとともに、生物の生息場所利用を中心とした野外生態学について、課題の設定・調査方法・データの解析・提示の実習を行う。

この実習では、前半2日間はガイダンス的な実習を行い、後半3日間は各人（あるいは小人数グループ）がそれぞれにテーマを定めて実習を継続する。最終日に各テーマの結果の発表と議論を行う。

3. 担当教官

谷田一三（大阪府立大学総合科学部 教授）

- 竹門康弘（大阪府立大学総合科学部 助教授）
成田哲也（京都大学生態学研究センター 助手）
4. 開催地
京都大学理学部木曾生物学研究所（長野県木曾郡木曾福島町兎野）
 5. 実習期間
1998年7月28日（火）～8月3日（月）
 6. 対象学生
原則として、学部学生（3・4回生）と修士課程大学院生。特別の場合には博士課程大学院生も認める。
 7. 受講定員
10名程度。（応募者が多数の場合には抽選を行う）
 8. 経費
受講費は不要。木曾生物学研究所までの往復運賃と、実習中の研究所における生活費（1日3食約1500円、シーツ代900円）を各人が負担。
 9. 単位
京都大学生態学研究センターとしては単位を発行しない。ただし、各学生の所属大学（又は学部）において、他大学の実習をその大学（学部）の単位として認める制度がある場合は、1単位相当の実習を受講した合格証を発行するので、受講学生各自が所属大学（学部）に本実習の単位を認めてもらう手続きをすること。
 10. 受講条件
受講学生は「学生教育研究災害障害保険」等に必ず加入していること。
 11. 必要提出書類
実習受講願を京都大学生態学研究センター研究協力掛へ提出（受講願用紙は生態学研究センター研究協力掛へ請求してください）。
 12. 受講願送付および問い合わせ先
〒520-0105 大津市下阪本4-1-23
京都大学生態学研究センター研究協力掛
TEL (077)-578-0580 FAX (077)-579-8457
（封筒の表に「公募実習受講願在中」と朱書すること）
 13. 申込期限
1998年7月10日（金）必着。

**京都大学生態学研究センター
1998年度（平成10年度）公開実習募集要項**

1. 実習課題
生態学分野の若手研究者を対象とした核酸の取り扱い実習
2. 実習の目的・実施内容
主として植物を材料として、DNAの抽出と集団内の遺伝的多型の検出に関する基礎的な実験を行う。
3. 担当教官
清水勇・大井和之・安井行雄（京都大学生態学研究センター）
4. 開催地
京都大学生態学研究センター・京都分室
（京都市左京区北白川西町・京都大学北部構内）
5. 実習期間
1998年7月27日（月）～31日（金）
6. 対象学生
原則として大学院修士及び博士課程学生

7. 受講定員
6名(設備に制約のあるため申込多数の場合は人数制限を行う)
8. 所要経費
旅費及び滞在費は自己負担とする。
9. 単位
京都大学生態学研究センターとしては単位を発行しない。ただし、受講学生の所属大学において他大学の実習をその大学の単位として認める制度が存在する場合は、1単位相当の実習を受講した合格証を発行するので、受講学生各自が本実習を所属大学の単位に認めてもらう手続きをとること。
10. 受講条件
受講学生は学生教育研究災害障害保険等に必ず加入していること
11. 受講申込
受講希望者は、公開実習受講願いを下記まで請求し、申し込むこと。
〒520-0105 大津市下阪本 4-1-23
京都大学生態学研究センター 研究協力掛
Tel : 077-578-0580 Fax: 077-579-8457
12. 申込期限
1998年7月6日(月)必着

調査船「はす」 - 「Elodea II」の利用案内

調査船「はす」・「Elodea」の運航に関しては、原則としてセンターの「調査船運用委員会」が当たります。

調査船を利用する場合、事前に運航計画を作成するための利用申し込み(・,・,・)と、運航計画決定後に提出する正式な申込書類(・)と二段階に提出して下さい。

- ・ **定期・短期利用申し込み先**(日程調整用)
e-mail : koita@ecology.kyoto-u.ac.jp(小坂橋忠俊)
Fax : 077-579-8457
京都大学生態学研究センター
調査船運用委員会 小坂橋 忠俊

申し込み後、e-mail, Fax 等での運行計画調整にご協力願います。不明な点、質問等がありましたら、上記までご連絡下さい。

- ・ **定期・短期利用申し込み**(事務手続き書類の提出)

・の申し込みで運航計画が決定された後、速やかに利用申込書を当センター総務掛宛てに提出して下さい。(用紙は、当センター事務室に請求してください。)学部生、大学院生等は、指導教官の承認が必要です。

提出先: 〒520-0105 大津市下阪本 4-1-23
京都大学生態学研究センター 総務掛
Phone 077-578-0580
Fax 077-579-8457

- ・ **定期利用申し込み**(日程調整用)

予め利用希望日・内容等がわかっている方は、こちらを利用して下さい。

1. 1年を3期(1～4月, 5～8月, 9～12月)に分け、定期利用による一ヶ月の出港日数は10日をめどとします。
2. 申し込み期間は、それぞれ12月1～15日, 4月1～15日, 8月1～15日とし、16日以降に調整、決定を行い、連絡します。申し込みは、e-mail又はFaxにて、申込者の連絡先、日時、乗船者数、調査・採集内容、地点及び観測採集時間、当センター所有の観測・採集機器の使用を希・]する場合はこれらの内容を記入して下さい。希望日が固定でない場合は、変更可能な日を記入していただけると、調整が容易に進みます。また、利用希望日に予備日は含めないで下さい。

利用内容によっては、複数の申込者が同日に乗船することもあります。

荒天、その他の理由で調査船を利用できなかった場合は、短期利用申し込みを利用して下さい。

4ヶ月定期利用	申し込み期間
第1期(1月～4月)	12月1日から12月15日まで
第2期(5月～8月)	4月1日から4月15日まで
第3期(9月～12月)	8月1日から8月15日まで

・短期利用申し込み(日程調整用)

定期利用申し込みができなかった方、荒天、その他の理由で調査船を利用できなかった方、急な利用を申し込む方は、こちらを利用して下さい。

1. 利用希望日の7日前の9:00から申し込むことができます。
2. 申し込みは、e-mail又はFaxにて、申込者の連絡先、日時、乗船者数、調査・採集内容、これらの地点及び時間、当センター所有の観測・採集機器の使用を希望する場合はこれらの内容を記入して下さい。申込者が多数の場合、調整を行います。原則として先着順とします。



調査船仕様

1. 『はす』
全長12.5m, 8.5トン, 巡航速度20ノット
主要装備: DGPS, レーダ, 魚群探知機, 流向流速計, 風向風速計, 左舷ダビットウインチ, デリックアーマードケーブルウインチ
2. 『Elodea』
全長6.8m, 5トン未満, 巡航速度16ノット
主要装備: ロランCプロッタ

調査船利用規定

1. 利用者は、学生、大学院生等を含め、琵琶湖での調査・研究・教育を目的とするものとする。
2. 学生、大学院生等が利用する場合は指導教官の承認を必要とし、指導教官の同行を原則とする。
3. 利用にあたり、学生、大学院生等は、学生教育研究災害障害保険等に加入していること、有職者は所属機関において出張等の必要な事務手続きを行うものとする。
4. 利用にあたっては、事前に調査計画等を調査船運用委員会事務局に申し出るとともに、利用申込書をセンター(総務掛)へ提出すること。
5. 利用日程の調整は、調査船運用委員会で行う。

- 乗船にあたっては、出港前に船長と調査について綿密に打ち合わせをするとともに、乗船中は船長の指示に従うこと。
- 調査終了後は調査船の清掃に協力するとともに、ゴミはすべて持ち帰ること。
- 調査船に装備されているポータブルトイレを利用する場合は、事前に申し出るとともに、使用後は乗船者が協力し、所定の場所へ片付けること。
- 当センター外の利用者は、調査終了後に来訪者データベース用紙に記入し、提出すること。
- 調査船を利用して得られた成果を印刷物等として発表する場合は、京都大学生態学研究センターの調査船を利用したことを明記するとともに、印刷物等1部を当センターに提出する。

   **公募研究会の報告**   

**暖温帯から冷温帯への移行帯における植物多様性の
スケーリング解析**

佐藤利幸(信州大学理学部)

<開催日時> 1998年5月27-30日

<場所> 京都大学農学部芦生演習林

<代表者・参加者>

佐藤利幸(信州大学理教授)
菅原 敬(信州大学理助教授)
早坂祥彦(信州大学理院1)
久原雅夫(信州大学理院1)
真野秋綱(信州大学理4)
福原 隆(信州大学理4)

<研究内容>

芦生周辺のシダ植物の多様性・カンアオイ属の確認・コケの多様性調査にひきつづき夕刻には関係論とスケーリングの意見交換が行われた。

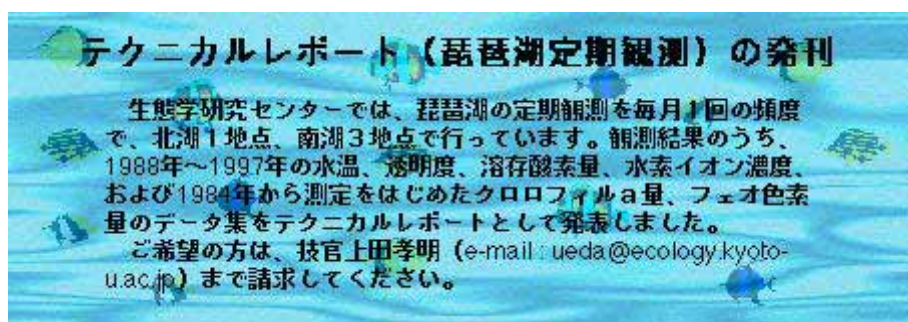
- 芦生周辺のシダ植物の多様性について、(1) 1 mx 1 mx 1 m、(2) 5 mx 5 mx 5 m の立方区の調査を4地点(100mx100mx100m)で行った。これらから京都北部のシダ多様性を予測した。確認総種数(ガンマ多様度)は50種である。アルファ多様度は(1)で 3.2 ± 1.0 (2)で 6.4 ± 2.0 である。これらの値は琉球(奄美・沖縄)とほぼ同じである。和歌山・三重の値より下回った。北海道・マレーシア・長野県のほぼ1.5倍である。シダ植物相からみると、50%が日本の北東要素、50%が南西要素である。芦生演習林周辺は予想通り、冷温帯・暖温帯要素の共存地域と結論できる。この地域の最大多様性のスケール特定には、さらなる研究継続が必要である。また今回は5種のメシダ属の葉形状の定量比較資料も採集した(福原)。
- 北陸から山陰地方に至る日本海側地域におけるカンアオイ属植物の分類学的調査、地理的分布に関する調査は不十分で、未解決の課題も多い。従来報告(北村・村田、1973; Ohwi, 1984)では京都北部から北陸南西部・山陰地方に産する常緑性のカンアオイはすべてアツミカンアオイ(*Asarum rigescens* F. Maek.)と分類されてきたが、最近出版された福井県植物誌(渡辺、1989)では未記載ながら、エチゼンカンアオイやハルザキカンアオイといった新分類群が認識されている。今回これらの植物の分類学的再検討ならびに詳細な地理分布域の把握を目的に芦生周辺を調査した結果、アツミカンアオイとは明らかに異なり、上記2分類群の

いずれかに相当すると思われる植物が京都北部にも産することが確認された。詳細な同定には開花期の花形態の比較検討が今後必要である。また地理分布についてもさらに西（中国地方）への継続調査が必要である。

3. コケの多様度についても調査が開始された（早坂）。針葉樹林の共通点はあるものの、アカマツの優占する藤井谷・ヒノキの優占する水殿川（中信州）とスギの優占する芦生周辺（京都北部）における印象は以下となる（解析中）。大型鮮類の頻度は水殿＞芦生＞藤井谷。標高では芦生＜＜水殿＝藤井谷である。河川（谷）規模・湿度環境では芦生＝水殿＞＞藤井谷であり、蘚苔類の連続群落規模が対応している印象がある。
4. 河川構造・植生構造・水生昆虫・魚類の4者関係の議論と野外観察（真野）および植物の比較繁殖生態の基礎資料として開花中の植物観察（久原）と意見交換が行われた。

<感想>

突然の依頼にもかかわらず、共同センターと演習林の方々の好意的な対応に感謝したい。また、立派な森林と複雑な地形立地は植物の環境異質性スケール選択の好適調査地域とおもう。



1998 - 99 年度京大生態学研究センター

協力研究員 (Guest Scientist) リスト

(1998年6月20日現在、任期は2000年3月まで)

氏名	所属	研究課題
大高明史	弘前大学教育学部	水生貧毛類の分類と生態
上田 宏	北海道大学水産学部附属洞爺湖臨湖実験所	サケ科魚類の母川記銘と母川識別機構 / 洞爺湖における水質保全および魚類生産管理
大串隆之	北海道大学低温科学研究所	動物と植物の相互作用
原口 昭	北海道大学農学部	泥炭地における物質動態と群集成立要因に関する研究
小野山敬一	帯広畜産大学	生態学基礎論
紺野康夫	帯広畜産大学畜産環境科学科生態系保護学講座	孤立環境下にある植物の個体群動態と保全
田中祐志	東京水産大学	大型動物プランクトンの生態

松宮義晴	東京大学海洋研究所	水産資源の評価と管理
宮島利宏	東京大学海洋研究所	珊瑚礁の物質循環論（とくに窒素サイクルについて）
上田恵介	立教大学理学部動物生態	鳥類の社会システムの研究 鳥と植物の共進化システムの解明
青木正敏	東京農工大学農学部	気象・土地利用変化に伴う植生上の熱・水蒸気・CO ₂ フラックス変化
楊 宗興	東京農工大学波丘地実験施設	窒素の生物地球化学的循環
渡辺泰徳	東京都立大学大学院理学研究科	水界生態学
倉本 宣	明治大学農学部	丸石河原固有植物の保全生物学的研究
吉田尚弘	東京工業大学大学院総合理工学 研究科	陸域生態系－大気相互作用の同位体生物地球化学
金子信博	横浜国立大学環境科学研究セン ター 土壤環境生物学研究室	土壤動物群集の維持機構
鈴木邦雄	横浜国立大学経営学部	熱帯湿地生態系の動態
犬伏和之	千葉大学園芸学部	農地および自然湿地からのメタン・亜酸化窒素ガス放 出
坂本一憲	千葉大学園芸学部	植物根圏における有用微生物及び微生物バイオマスの 機能解明とその利用
内田昌男	筑波大学生物科学系	森林大気中CO ₂ の酸素安定同位体比の変動要因とその 交換過程について
藤岡正博	農林水産省農業研究センター鳥 害研究室	農地の鳥類の行動及び生態
浦野栄一郎	農林水産省農業研究センター鳥 害研究室	農耕地の鳥類の行動・生態
森野 浩	茨城大学理学部	キタヨコエビ科のヨコエビ類の分類学的研究
平井英明	宇都宮大学農学部	森林土壌系の環境要因との相互作用の解析
松原健司	淑徳大学国際コミュニケーション 学部経営環境学科	熱帯湿地林およびその周辺地域における生物生産に関 する研究－安定同位体比からの解析－
崎尾 均	埼玉県林業試験場	溪畔域の攪乱体制と樹木の生活史からみた溪畔林の動 態
中本信忠	信州大学繊維学部応用生物科学 科	陸水生態学
平田 徹	山梨大学教育人間科学部	海洋とくに流れ藻や転石生物群集における群集構造の 安定性とその維持機構
佐藤 哲	南伊豆海洋生態ラボラトリー	カワスズメ科魚類の生態、行動、自然誌

吉岡崇仁	名古屋大学大気水圏科学研究所	陸域生態系における炭素・窒素循環の研究
市岡孝朗	名古屋大学大学院生命農学研究科	生物多様性の創出における植物の被食防衛の役割の解明
山本進一	名古屋大学農学部	森林群集の更新動態
渡辺 彰	名古屋大学農学部	水田からのメタン発生に関する研究 土壌有機物の動態に関する研究
森 誠一	岐阜経済大学環境生物	進化生態学、社会行動学、保全生物学
渡辺 守	三重大学教育学部	昆虫類（主として蝶類と蜻蛉目）の生活史戦略
横山 寿	養殖研究所	沿岸水域における生物群集の動態
石樋由香	養殖研究所	沿岸水域における生物群集の動態
高橋さち子	龍谷大学	淡水産ハゼ類の生態・系統進化
遠藤修一	滋賀大学教育学部	びわ湖における湖水と物質の循環機構 びわ湖及び滋賀県の気象特性
國松孝男	滋賀県立大学環境科学部	森林流出水の水質形成機構
三田村緒佐武	滋賀県立大学環境科学部 湖沼環境実験施設	水圏における物質循環
野間直彦	滋賀県立大学環境科学部	果実生産と種子散布の生態
亀田佳代子	滋賀県立琵琶湖博物館	生態系における鳥類の役割
大竹昭郎		アブラムシ（昆虫綱半翅目）の個体群解析
山倉拓夫	大阪市立大学理学部	熱帯雨林の生物多様性および群集動態
寺島一郎	大阪大学大学院理学研究科生物科学専攻	光合成と呼吸の生理生態学
半場祐子	大阪大学大学院理学研究科	炭素安定同位体を用いた樹木の生理生態に関する研究
宮澤真一	大阪大学大学院理学研究科生物科学	葉肉細胞の形態的特性が葉内CO ₂ ガス拡散と葉の物理的強度に与える影響について
近藤高貴	大阪教育大学教養学科	淡水産二枚貝の繁殖生態と分類
岡崎純子	大阪教育大学教員養成	被子植物の性型進化
篠崎吉郎		数理生態学
高桑正樹	大阪千代田短期大学	土壌生物群集の構造解析
百瀬邦泰	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	熱帯林の原生的植生および人為的植生における生物間相互作用と生物多様性の保全
杉山雅人	京都大学総合人間学部	水圏における微量元素の動態
久野英二	京都大学大学院農学研究科	昆虫個体群の動態とその管理に関する数理生態学的研

		究
渡辺弘之	京都大学大学院農学研究科森林科学専攻	熱帯林の再生と維持
今井一郎	京都大学大学院農学研究科応用生物科学専攻 海洋環境微生物学分野	沿岸海域における植物プランクトンの生理生態と生活史戦略 殺藻微生物の生理生態と赤潮の制御
片山幸士	京都大学大学院農学研究科	森林生態系での化学物質の挙動
陀安一郎	京都大学大学院農学研究科地域環境科学専攻 森林生態学研究室	熱帯林の分解システムの研究
西田利貞	京都大学大学院理学研究科	大型類人猿の行動生態学
森 豊彦		自然生態系を通じた環境教育
重定南奈子	奈良女子大学	侵入の数理生態学
浦部美佐子	奈良女子大学理学部	琵琶湖産貝類に寄生する吸虫類の生態学的研究
岩崎敬二	奈良大学教養部	食物連鎖と住み込み連鎖の結合をめざして / 新しい相互作用網の構築による群集理論の新展開
小林不二夫	近畿大学大学院農学研究科水産学専攻	植物プランクトンの自然蛍光と基礎生産の関係
西村 登	金沢大学日本海域研究所	河川底生動物群集のハビタット構造と生息状況
江崎保男	姫路工業大学自然環境科学研究所	ブナ林の鳥類を中心とする動物群集の研究
長野義春	(財)中海水鳥国際交流基金財団 米子水鳥公園	湿地環境のワイズユースと水鳥の保全生物学的研究
國井秀伸	島根大学汽水域研究センター	水生植物の種多様性に関する研究
三枝誠行	岡山大学理学部	底生およびプランクトン性小甲殻類の日周活動と測時機構の解析
梯 正之	広島大学医学部保健学科	ホスト-病原体システムにおける動態と進化
中越信和	広島大学総合科学部	人類の活動が景観システムに及ぼす影響
鈴木和雄	山口県立大学生活科学部	植物と昆虫との共進化系
藤島政博	山口大学理学部自然情報科学科	細胞内共生細菌による宿主細胞の環境適応機構
渡辺 直	香川大学農学部	カゲロウ類の生活史研究を主とした陸水生態学
市野隆雄	香川大学農学部	アリをめぐる防衛共生系の生態と進化
山岡耕作	高知大学海洋生物教育研究センター	魚類形態生活機能学

深見公雄	高知大学農学部	海洋生態系における細菌類をはじめとした微生物群集の相互作用に関する研究
香川尚徳	愛媛大学農学部	貯水池の生態学的水質管理
中野伸一	愛媛大学農学部	富栄養化水域における微生物食物連鎖の特性
越智晴基		タンガニカ湖の魚類の社会構造の多様性と種間関係
巖佐 庸	九州大学理学部	野生生物集団の絶滅のリスク評価法
鈴木英治	鹿児島大学理学部地球環境科学科	熱帯林の植物生態
杉尾幸司	沖縄県立開邦高等学校	シロアリにおける社会性の進化と生活史戦略
萩原秋男	琉球大学理学部	森林生態系の構造と機能
川幡佳一	金沢大学教育学部	浮遊動物（特にカイアシ類）の生態
田中 晋	富山大学教育学部	甲殻類枝角目の分類と生態
箕浦幸治	東北大学大学院理学研究科	地球環境と生物の進化
松井 淳	東北大学大学院理学研究科生物学専攻	湿生植物の栄養塩利用に関する研究
日野修次	山形大学理学部物質生命化学科	水界微生物の環境適応と多様性、およびそれらが関与する物質循環



部門新設



平成 10 年 4 月に実験生態研究部門が新設されました。清水勇教授（6 月 1 日付）と川端善一郎教授（7 月 1 日付）がこの部門の研究にあたります。

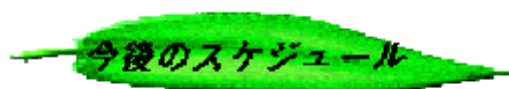


編集後記



- 大津、下阪本での最後の夏がやってきました。なんとかして乗り切らなければなりません。
- センターニュースでは、皆様からのご意見・記事などをお待ちしています。

（杉本敦子）



センターの行事

1998年

- 8月20日 センター・ニュース No. 52
- 10月20日 センター・ニュース No. 53
- 12月20日 センター・ニュース No. 54

センターあるいは京大環境フォーラム、DIWPA 関連の研究会

1998年

- 7月5日～7月11日 DIWPA mini-workshop : fig ecology (マレーシア、サラワク)
- 7月20日～8月10日 国際セミナー「International Field Biology Course in Western Pacific and Asia」(屋久島)
- 11月5日～8日 BICER, BDP and DIWPA Joint International Symposium on Lake Baikal (横浜)
- 11月10日～13日 DIWPA Workshop "Developing Standards for Global Monitoring on Biodiversity" (京都・京大会館)

関連分野の研究会・シンポジウム

1998年

- 7月19日～25日 VII INTECOL (Florence, Italy)
 - 9月21日～23日 日本陸水学会第63回大会(松本)
 - 10月19日～23日 IUFRO Division 8 Conference Environmental Forest Science (Kyoto)
 - 11月4日～8日 Second International Forest Canopy Conference "Forest Canopies 98 :Global Perspectives"(Sarasota, Florida, USA)
 - 11月15日～19日 The 9th Pacific Science Inter-Congress (台北)
-